

武蔵野日曜聖書講筵 年頭集会

エホバの幕屋

——詩篇第27篇——

1983年1月9日

小池辰雄

わが光、わが救い キリストはわが光 キリストの中に住む キリストという幕屋 幕屋は動く城 満月を抱いてうかぶ三日の月 貴神は棄てない 今にみている キリストという聖名
キリストに全託せよ

●わが光、わが救い

今日は詩篇の27篇です。自分の訳をよみながらいきます。始めに「ダビデの歌」とありますが、原文には「歌」という語はなくて、ただ「ダビデの」とあるだけです。

【詩篇27】（私訳）

ダビデの。

1 エホバはわが光、わが救い。私は誰をかおそれよう。

エホバはわが生命の力、私は誰をか恐れよう。

2 悪者どもが私に迫ってわが肉をくらおうとしたが、

わが仇人らわが敵どもが私に向かつて。

彼らは躓き仆れた。

3 よし軍営が私に対し屯するともわが心はおそれない。

よし戦が私に向かつて起こりたつともこれに対して私は安泰だ。

4 われ 一事をエホバにこう。これをこそ私は願う、

わが生命の日のかぎりエホバの家に住まわんことぞ。

エホバの恩愛を仰ぎみ、その宮で深く思うために。

5 そは患難の日に彼は私をその幕屋にひそませ、

その幕屋のおくに私をかくし

高く巖のうえに私を置きたもうたから。

6 今やわが首は私をめぐるわが敵の上にあげられる。

この救いに私は彼の幕屋にあって歓喜の捧げ物をささげる。

私は歌う、エホバに讃歌をかなでる。

7 エホバよ、わが叫ぶわが声をきき、

私を憐み私に応えてください。



8 わが心はあなたに言った、

エホバよあなたの^{かお}のみ面を求めますと。

お前たちわが顔を尋ねよと聞いたので。

9 汝^なが聖顔を私からかくしたもうな、

怒って汝が僕をとおざけたもうな、

あなたはわが助けにてありたもう。

私をおいいだし、私をすてたもうな、わが救いの神よ。

10 たとえわが父わが母が私を棄てさるとも

エホバは私を抱きたもう。

11 エホバよ汝^なが途^{みち}を私に示し、私を平坦な途にみちびきたまえ。

私を^{うかが}窺うものがいるので。

12 私をわが敵の欲するままにたずねゆだねたもうな。

そは偽りの証人、凶暴^{あかしびと あらび}をいぶく者が私に對しておこり立っているので。

13 私はエホバの恵みを生ける者の地で見ることを信じないでおられるか。

14 エホバを^{まち}俟望め、雄々しかれ、汝がこころ堅^{かた}くあれ。

エホバをまちのぞめ。

この訳は少し前の訳で、多少変えるところがありますけれども。

1 エホバはわが光、わが救い。

であるという。いつも申し上げているとおり、ヘブライの詩は対句になっている。光が救いであるという。いつも同義語につかう。逆にいうと、

「エホバは救いの光だ」

ということ。

私は誰をかおそれよう。

恐れるものは一つもないと。

エホバはわが生命のちから、私は誰^{おそ}をか懼れよう。

これも「力の生命なり」でも結構です。生命は力をもっている。申命記33章27節に、

「永遠^{いま}に在^{いま}す神は住所^{すみか}なり下には永遠^{かいな}の腕あり……」(申命記33・27)

「永遠^{かいな}の腕」という言葉があります。力の象徴はよく右の腕でいわれる。

「神の永遠の腕」

とは素晴らしい言葉です。ヘブライの詩人は非常に具象的に語る。けれども決して偶像はつくらない。非常に具象的に語りますが、全部その内容は霊的です。

もうこの詩篇27篇は最初のこの第1節で大きな——ちょうどベートーヴェンの第五シンフォニーの最初のガンとくるあの音みたい——この1節が私たちの魂の中にもガンとくるわけです。これであとが展開していく。



「わが光、わが救い」

と、むしろそういうように畳みかけて言った方が力がある。「光」といえば、もう具体的には私たちはすぐ太陽を想いだす。

こないだも言いましたけれども、日本の国旗は太陽なんですから、どうしてもそのことをみんな忘れてしまっているか。私は三日間あそこに国旗を掲げておいた。本当は一週間くらい掲げたかったけれども。もう情けないです、この日本という国は。なにも門に旗をたてることが何かではありませんけれども。我々自身が本当に国旗になればダメです。

●キリストはわが光

そういう意味で、

「エホバはわが光」

というときには、「わが」ということに気をつけてください、ただ「光」ではないですから。

「わが光」

なんだ。「私の光」だと。「私の光」と言うときは、もうエホバと一つになれば、「私の光」という告白は本ものにならない。だから、

「汝らは世の光なり」

とキリストは言われた。

「キリストはわが光なり」

ということ。キリストは私の光であるということは、

「わがうちにありて光りたもう者である」

ということになる。もう旧約の素晴らしい言葉は全部キリストを中心にして読まなければダメですよ。キリストの光です。

「我を見よ」

というなら、

「キリストの光を見よ」

ということ。

「エホバはわが救いである」

と。キリストに私は完全に救われました。そうしたら今度は、必ず救いのもとになる。他の人を救いにもっていく。私は、

「もうプロテスタントが非常に観念にズレているから我々はもつと行動的にならなくては」

とはつきり言います。我々の信仰は行動的でなければ信仰とはいわない。

「エホバはわが生命の力なり」

と。この「力」というのは、いつも言いますが、ゲーテは「言」(ヴォルト)を「意」(ズィン)、



「力」(クラフト)、「行」(タート)と言い換えた。さすがにゲートです。あのヨハネ伝の第1章1節を、

『原始に言あり』ではものたりない。思いがあった。思いではダメだ。力があった。最後に、『行為があった』といって落ち着いた」

という。ここに「力」「行為」とある。そういう意味でパウロも、

「福音は言にあらず、力なり」

と言った。「言」も我々が語らしめられている言葉は単なる「言」ではありません。

「力即行」

です。「力行」という言葉もあるね、力強い行為という。神は力のある生命なんだ。愛といったって、あの神の愛は力がある。生命でも愛でも光でも全部、力をもっている。だから、それがすぐ行動に現れる。

「信即行」

としよっちゅう言っている通りです。

今年はマルチン・ルターの生誕5百年だけれども、私は「ルターとゲート」という論文も書きたいと思っています。プロテスタントがもう観念でね、

「信仰によって義とされる」

という命題にすっかりこだわってしまったっている。それは「信仰によって義とされる」というのは素晴らしい内容です、霊的な意味において。「義とされる」というのは

「義をたまわる」

んです、観念的に義とされたってしょうがない。

●体感が一切

そういう、「信行一如」ということ。ヤコブ書が、

「アブラハムは行為によって救われた。義とされた」

と言ったのは、その意味において真理をもっている。ルターが

「ヤコブ書は藁^{わら}の書簡だ」

と言ったのは、ヤコブ書の読みまちがい。それはルターとしては、当時のカトリックに対しては、

「ただ行為ばかり考えているからダメだ。いわゆる行為をただ現象として考えて、このよつな行為でなければならぬといったら律法になるから、それではダメだ」

といって、ルターはこれ否定して、「信のみ」と言った。けれども、

『信のみ』が本ものならば行にならざるを得ない」

と彼もまた言っているんです、別なところで。ならざるを得ない世界。もう全部、一貫している世界です。人間だからそれは躓いたり転んだり欠けたりします。けれども、その魂



の動きは一貫してなければダメです、二段構えでは。ですから、

「エホバはわが生命の力である」

と。行為に現れてくる。

「こうしようか、ああしようか」

ではない。もう、ざるを得ない行為に出てくる。それが同時に証しであり、同時に神への讃美である。行為をもつて讃美するのが一番の讃美ですから。だから、

「はじめに行為あり」

とゲーテがファウストをして書かした。さすがです。

「行為が一切である」(タート・イスト・アッレス)

という。また、

「体感が一切である」(ゲフール・イスト・アッレス)

と言った、その「ゲフール」は「体感」だから、全部存在で感ずるから、それが行為にならざるを得ない。全存在的に生きている人はみんなそういうことになる。それを

「全人的」

という。「全人」というのは、全き完全な人ということではない。

「その言うことを為すことが全存在的である」

ということが「全人的」ということ、分裂のないということ。これは芸術の世界で打ち込む人はこういう気持はよくおわかりだと思いますけれども。だから私は、

「神は最大の芸術家だ」

と言う。とにかく今年は特に、

「いかに我々が行動していくことが本当に生きることだ」

ということ。だから、生即行でもある。結果を言っているのではないですよ、この「行」というのは。いいですか。ざるを得ない、現れ方をした、その結果はどういうようになるか、いいんです、そんなことは。

「本当にキリストに在って動いているか」

それだけ。もちろんそこには、人間には知意がありますから、その三つの要素がその人らしくバランスをとって動いていただきたいけれども。

もういろんな、行き詰まったり、あるいは疑ったり、問題があつたりする人こそ本当に来ていただきたいんです、この集会には。今日も来ていただきたい人がまた来ていませんから、困るですよ。

●キリストの中に住む

「エホバはわが光、わが救いいなり。われ誰をか懼れん」と。
おそ



「キリストはわが生命の力なり、わが懼るべきものは誰ぞや」

「キリストが光となり、生命となり、力となり、救いとなつて、もう言うことがない」

という。全くそうです。そして、この光を、この力を、この救いを人にわかたざるを得ない。福音というのは限りなく展開して、限りなくわけていく、そういう世界だから。無窮にいたしながら、無窮に分けていく。もう大いに、私に言われなくても、どしどし実行してくださいよ。

「この集会は我々の集会だから、どうやったらよりよく展開していくんだろうか」と。私はちよつとも命令したくないです、本当は。

2 悪者どもが私に迫つてわが肉をくらおうとしたが、

わが仇人らわが敵どもが私に向かつて。

それはもう一遍くりかえして言っている。

彼らは躓き仆れた。

実際、何か――この詩篇というのは具体的にあまり書かないので、言葉自身は具体的なことばですけれども内容的にどういうことにでつくわしたかということとはあまり言わないものだから――こういう事件だかさっぱり分からないけれども。とにかくある具体的なものにぶつかつて、敵がいて、そして彼らは躓き倒れた。

3 縦いいくさびと營をつらねて我をせむるともわが心おそれじ。たとい戦お

こりて我をせむるとも我になお恃あり

この文語訳はきれいです、本当に。素晴らしい。私も本当はこれを文語で訳したい。

3 よし軍營が私に対し屯するとわが心はおそれない。

よし戦が私に向かつて起こりたつともこれに対して私は安泰だ。

敵だとか戦人は恐くない。我には頼みがある、ちゃんと頼むものがあると。依り頼む、信頼するという。依り頼む、信頼です。

私も藤井先生に散々、

「信頼」

という言葉をお教わつたよ。藤井先生はよく信頼という言葉を使った。「信仰」よりも「信頼」という言葉の方をたくさん使っていた。神さまに信頼するという。先生は本当に信頼して生きてました。なにも力む必要はない。信頼して、そして本当の信頼なら、必ず力がくる。力が来なかったら、そういう信頼はむなし。力の秘訣なんだよね、これが。

だから結局は、こちらは

「無」

なんです。

「無即無限無量」

の力がくる。どんなに孤軍でも私は天に万軍がいるから、絶対へこたれないで進んで行き



ます。「万軍が天にいる」といったって、天から降りてくるよ、万軍の将はキリストです。サタンになめられません。

4 われ^{ひとつのこと}一事をエホバにこう。これをこそ私は願う、

これは愉快な言葉だね。一事をキリストに願いましたと。

わが生命の日のかぎりエホバの家に住まわんことぞ。

エホバの恩愛^{めぐみ}を仰ぎみ、その宮で深く思うために。

私はこれをこうよむ。

「私は一つのことをキリストに願います。これを求めます。私はキリストの美わしきを仰ぎ、その全実存を見んがためにわが世にあらんかぎりには、キリストの幕屋、キリストの家、キリストの中に住まわんことこそ願います」

と。キリストの中に住むと、

「エン・クリスト」(キリストの中に)

だと、そうするとキリストの全実存が見えてくる。即ちマタイ・マルコ・ルカ・ヨハネ、この福音書が本当に見えてきます。だから、この

「宮、家、幕屋、^{かりいお}飯廬」

と書いてあるのはみんな同じこと

「キリストという幕屋」

です。「幕屋」という言葉はパウロはこの肉体のことにも使いました。

「この世の幕屋は今に亡びるけれども、天にて造られるところの永遠の幕屋は……」

と。幕屋は我々の宗教的な共同体が幕屋ですけども、しかし身体のこと幕屋という。

「我らの間に幕屋をはった」

というヨハネ伝1章14節は、

「肉体をとって我々の間に宿り給うた」

ことを言った言葉です、

「幕屋をはった」

というのは。そういうキリストという幕屋なんです。キリストという幕屋の一員となる、その一要素となる。我々はその中に住んでしまっている。

「十字架・聖霊」

です。この幕屋の大黒柱は十字架、その中は聖霊。だから結局、幕屋は同時にキリストそのものを表すようなことにもなります。こんなことは今日初めて言う。

●キリストという幕屋

そういうキリストという幕屋、その中に住むことを願う。この一事を。そしてキリストと一緒に旅をしていく。こんな楽しいことはない。そして、一週間毎にこうやって皆さん



と集まって集会しているのは、これはオアシスだからね。砂漠の沃地、泉の湧いている木陰のある、ヤシの木やなんかがある——シルクロードなんていうのは大変なところだ——日曜日はオアシスで神の言葉と力の饗宴の中に入っている。そして一緒にキリストの生命、光、愛、力にあずかつて、そしてまた六日間の旅をものすごく続けていく。だから、

「日曜毎に集会に来なさいよ」

と言っている。まあ現実の生活にはいろいろな事情でどうしても来れないこともありますよ。そんなことを私はどうの言っているのではない。それをとにかくこの世のことに負けてしまつてはダメだということです。

「私は日曜はキリストのものですから、特にキリストのところに、オアシスに行く

んですよ。あなたもせっかく来たけれども、一緒に来ませんか」

と。お客さんがきたら、一緒に連れてきないさいよ。

「お客さんが来たから集会に来れません」

と何を言っているか。そういうことに負けてはダメです。

「仕事があるから」

というなら、仕事は休みなさい。そして集会に来たら、こんどは晩から仕事をやってもら。ものすごい力があつてできるから。時間なんてものは単なる長短ではない。質的にできま。すから。

とにかく、この『随想集』（著作集第六巻1982年12月刊）を発送するのでも随分考えながらやっているんですよ。この人は果たして住所が変わっていないだろうかなんてね。普段は一人でやっている。この近所に誰かいるといいんだけど、いないんだものこの近所には。仕方がない。とにかく都会の生活はみなさんお忙しいんだ、正直。よくわかつている。そこへいくと、京都なんかまだいい方だ。東京というのはどうにもしようがない。東京というのはあまり本当の意味で住むところではない。まあ仕方がない。『エン・クリスト』を出すときもやはり私は祈りの心で封の上書きをしている。

時たま昔の、大学を卒業したやつが、

「やはり昔の先生の朝礼のことが心によみがえってきて、本当におかげさまで」

なんて手紙をくれるのがある。そうすると私はすぐ——美学の方のことをやっているやつだから——『芸術の魂』を贈つてやった。向こうはびっくりするかもしれない。

とにかく、そういう人間の交わりの、魂の世界というのは、本当にお互いに火花の散っているような、そういう在り方をしていきたいわけです。ただ儀礼的なことではおもしろくない。年賀状も、印刷だけのものには返事を書かない。何かそこに文句がないとね——私は文句をいう（笑）——印刷だけのものでは。それは大勢だから仕方がない、印刷もしなければならぬでしょうけれども。私にくれるなら何か書いてくれなければ。私は魂の人間だから、刷りものではない。私にどうにもならない。



「それでは、先生の書いたものはみんな刷っていてしようがないじゃないか」
と。それは矛盾しているけれども仕方がない(笑)。本は刷らなければ仕方がないから。

●幕屋は動く城

5 エホバはなやみの日にその行宮^{かりいお}のうちに我をひそませ、その幕屋のおくに
われをかくし巖^{いわお}のうえに我をたかく置きたもうべければなり。」

「幕屋」といったり、「巖^{いわお}」といったり、キリストを「千歳^{ちとせ}の岩」という。

「岩の上に家を建てないで、砂の上に建てたらダメだ」

と、キリストの山上の垂訓の最後にある。キリストは岩でありまた城である。マルチン・ルターが、

「神は力強き堅き城である」

という有名な歌をつくった。「城」というのはもちろん聖書からきている。本当の城はじつとしていない。「動く城」というのは海軍の軍艦のことをいう。けれども、「幕屋」は——幕で張られているから城でも何でもない——砂の上でも岩の上でもつくれる。山の上にもつくれる。非常に動的なものだ。「幕屋」というのはすばらしい。さすがは創世記から黙示録まで、この聖書の世界は

「幕屋の動的な神さまの旅」

なんだ。だから、

「幕屋の中にあるキリスト」

が我々の本当の城、動く城なんだ。キリストというのは動く城だ。こんなことは今日初めて言う。キリストは動く城です。

ソ連に変なのがいるらしいよ。あの宗教を否定している国が、もう科学のあるひとつの限界がきたから、最後は念力だと言っている。念力で敵の飛行機も落としてしまう。霊の力だよ。霊的人物がグツとみれば、飛行機が落っこちてしまう。

「この山に海に移れといえ、移る」

とキリストは言われたが、最後はやはり霊的な力です。だから、キリストという驚くべき霊人をもっている幕屋は動く城で、これは絶対にやつつけられない。もうはつきりしています。私はちつとも恐くない。もういよいよ使徒的次元に入っていきたい。誰が何と言おうといい。私と同じ気持で行く人はどこまでも一緒に行ってくれる。

どうぞ、ソ連の念力に負けないように。そういうやつがいるそうだよ。歩いている人をグツと見ると止まってしまうそう(笑)。それは悪いものに対しては、念力はいいけれども、それを魔力的に使ったらいかん、魔力になったら。善きことに使わなければ。聖霊の世界は善きことでなければ動かないですから、そこは大丈夫。我々はキリストにおいて祈っている世界にはそういうことはない。霊の世界も絶対に私してはいかんですよ。



「賜りたる世界」

ですから。賜りたる世界を自分の力になったとおもったら大間違いです。

さっきの「わが力」というのは、キリストが主体であるところの力なので、自分を主体にしている力ではない。そこは間違わないようにしてください。われそのものはどこまでも無者です。私は

「キリストの無者」

もう徹底的に無者です。何ものでもない。来て働くのはキリストなんです。それが智慧であらうが、力であらうが、何であらうが。そうなったら楽でしょうがなくて、また力が来てしょうがない。はつきり言います。ひとつも力みではない。

「武蔵野幕屋」

なんてものは、あるかなきかの如き存在だけれども、これは原始力をもっている存在なんだ。今に時がきたらわかるから。もういい加減なひとはどんどん出て行ってください、いいから。何だかんだ言っているひとは、どうぞ出て行ってください。いいですから。

「人間小池」なんて信用しなくていい。私はキリストだけを信用していく。自分なんか信用してませんから。私はどう言われたって、何も弁護しません。キリストが全部、私をかばってくださいますから、何も心配しません。

もういるんだよ、いろんなやつがね。まあ気の毒だな、可哀相だな、威張っているけど、お気の毒なはなしだというわけです。この

「幕屋」

というのは正直、私が言い出したんだから。いわゆる「マクヤ」グループもありますけれども。ゴツチャにしないでください。

「神の新天地に向かっている歴史」

ですから、私たちはその神の歴史の一端をうけたまわって、そしてこの人生を進んでいく。皆さんの生涯は一人ひとり、非常に意味のある——たとえばそれが50年であろうと何十年であろうと——永遠的な意味をもっている。人生観というのは、そういう

「神の歴史の一環」

としての大きな意味をもっていることをはつきりと認識してください。

今の青年はもう本当にしょうがないね。だから、ここに来ている青年諸君は非常に重大なことを聞いているし、また使命をもっているから、それだけ自覚していただきたい。マンガでゴタゴタやっているような世界は、日本は亡びるよ、こんなことをしていたら。それはマンガにも優良なマンガもあるでしょう。全部のマンガを私は否定しているわけではない。



●満月を抱いてうかぶ三日の月

この詩篇は6節でいつぱん切れる。7節からはまたちょっと様子が変わる。学者は、

「これは一人の人が書いたのではない、別な人が書いた二つのものを一つにした」

という。すぐ学者というのはいさかい外側の判断をする。人間は、人間の心の中は、闇があつたり、光があつたり、黄昏^{たそがれ}があつたり、いろいろですよ。いろいろな状況を一人のひとがもっている、みんな劇的に。それが構成されているだけのものはなしです。そんな体裁のいい世界ではない。だから、ドラマだと言っている。ただし、

「ドラマであつて、主人公はキリストになつていなければダメだ」

というだけのものはなし。どんなに立派そうにみえても、それは人間が主体であつたら必ずダメですよ。どんなに破れていても、キリストが主体だったら、それは円現していきます。だから、私は三日月なんだ。

「満月を抱^{いだ}いてうかぶ三日^{みか}の月」

というのは私の本当の告白です。満月はキリストだ。キリストという満月を抱いているんだ、私は。

7 わが声をあげて叫ぶときエホバよきき給え。また憐^{あわれ}みてわれに応えたまえ。

「わが声をあげて叫ぶとき」と——ここから変わるでしょ——あなたの本願で応えてください。私はこの「本願」という言葉が大好きです。弥陀の本願、如来の本願、

「キリストの本願」

という。キリストが私たちに對して願うことは必ず成るから、「憐れみて」なんて言つたつて、本願で応えてくれる。「あわれみ」という言葉は情けなく響く。「あわれんでください」は、

「あなたの本願をもつて応えてください」

ということ。祈りは叫び、質的には叫びなんです。なにも大きな声を出さなくてもいい。U君の集会にはなかなか大きな声を出すのがいるけれども(笑)、結構だよ。沈黙の叫びとというのがある。とにかくどんな優しい言葉でも声でも結構ですが、その質は叫びでなければダメなんです。それはもうこの本願が来ますから、その叫びを必ず本願がきいてくださる。叫び以上のことをきいてくださる。

「何がどうなつても神さまの、キリストの本願が成る」

と、本当に決め込んでごらん。もう非常な平安がくるから。

「私にはわからん。ただしキリストの本願は成る」

といって進んでください。何か知らんけど、すごいことになっていくから。これもみんな全身的です、すべてが。叫びにしても何でも。もう全身的なんです、全部。これは全的と言おうが、全身的と言おうがいい。分裂のない世界です。「分裂がない」というと、

「それは純粹でなければいかん」

なんて、そうじゃない。もうガタガタで結構だが、そのガタガタのまんまということですよ。



「ガタガタのまままでいきなさい、そうしたらそこに凄いことが起きる」ということです。

8 なんじらわが面^{かお}をたずねもとめよと(斯る聖言のありしとき) わが心なんじにむかいてエホバよ我なんじの聖顔^{みかお}をたずねんといえり。

ここに「聖顔^{みかお}」という言葉がある。「エホバの聖顔」といつたって困るよ、誰も見たことがないから。けれども、「聖顔」といつている。旧約の信仰はすごいよね、「神さまの聖顔」といつている。本当に見たことがないけれども、とにかく神さまは霊的人格——人格だから神格だか知らないけれども——

「霊的人格神格者」

だ。その「聖顔をたずねる」という。

私たちはありがたいことに、キリストという聖顔がある。キリストの聖顔は誰も知らない、本当は。相対的な聖顔はわからない。けれども、何か知らんけれども、光っているキリストの愛の底光りをしているところの聖顔だよな。二千光年の向こうから望遠鏡で見たら、キリストが見える。二千年前のキリストが出てくるよ。

宇宙の年齢は120億年か。やっぱり宇宙は無から生じたんだな、年齢というのは。生まれた時からだから。宇宙が生じたという。どういうんだか知らないけれども。まあとにかく、誰か天文学をやりなさいよ、おもしろいから。どんな勉強、学問をしたって、それで信仰がグラつくような信仰は本ものの信仰ではない。何さまケチクサイね、このクリスチャンというのは。だけれども、キリストは宇宙人だからね。どうぞ、宇宙的な気宇になつていただきたいわけです。無窮に。

●貴神は棄てない

9 ねがわくは聖顔^{みかお}をかくしたもうなかれ、怒りてなんじの僕をとおぎけたもうなかれ、汝はわれの助けなり。噫^{ああ}、わがすくい^あの神よ、われをおいいだし

我をすてたもうなかれ。

「ねがわくは聖顔^{みかお}をかくしたもうなかれ」

と、非常に切ない気持ちだね。恋人同志は顔がはやく見たいんですよ。そのようなわけですから、相手は神さまだからね、絶対者の。そしてキリストですから。キリストの聖顔が隠れたら大変だ。

キリストの聖顔を見たかったら、直ちに福音書に來なさい。そうしたら見えるから。見えざる顔が見える。現実のキリストよりかすごい顔が見える。相対的な地上にいらっしやつたキリストよりかもつと凄いキリストが見えるから、福音書の中で。

皆さん、本当に福音書を愛読してますか。福音書くらい破りとしてポケットに入れておきなさい。すこしキチガイにならなければダメですよ、福音の世界は。



「破るのは惜しいな」

なんて。また買ってくればいい。私は破つたのがいくつもある。隣でマンガなんかみているやつのところでちゃんと聖書を読んでいてやれ。この本を見ろというわけで。シャクにさわることばかりだからね。

しかし一番、^{しゃく}癪にさわるのは——まあ「癪にさわる」という言葉はおかしいけれども——とにかく大学の先生も、中高の先生も、聖書に來ようとは思わない。私は獨協ですこし遠慮していて、今おもうと、あんなに遠慮するのではなかったと思つた。もつとぶちまけて福音のことを語ればよかったと思う。後悔しているよ。学校だから少し遠慮していたけれども。もう遠慮する必要はひとつもない。本ものには必ず魂はひびいてくるから。

^{みかお}ねがわくは聖顔をかくしたもうなかれ、怒りてなんじの僕をとおぎけたもうなかれ、汝はわれの助けなり。^{あゐ}噫、わがすくい^あの神よ、われをおいだし我をすてたもうなかれ。

えらくこの7節以下は切ない祈りをやっているわけだ。

¹⁰わが父母われをすつるともエホバわれを迎えたまわん。

これは著しい言葉だ。お父さんお母さんが子どもを棄てるということは、よくよくでなければいけないわけだ。この頃はいろんな現象が起きているけれども。親子の関係くらい、とにかく地上において密なる関係はない。たとえ親が棄ててもと。しかもここは二通り、父母とはつきり言っているんです、ヘブライ語でも。

「父と母とが自分を棄てても、エホバはわれを迎えたまわん」

という。これは詩篇ではこう書いてあるが、イザヤ書では、

「たとえ父母が棄てても私は棄てないよ」

と言っている。預言者は神さまの言葉を伝えている。詩篇はこちらから祈りかかっている。だから、本当は預言者の方が深いんです。本願の世界を預言者は語っている。詩篇は祈りで、こちら側が多い。しかし、この祈りは、本願がかかっているから本当の祈りになるので、本願のない祈りなんてものは本当はダメなんだ。

「父母がすてても神さまは我を迎えたまわん」

と。神さまは迎えてくださると。天蓋孤独でもうどうにもならん。一番親しい人から棄てられても、自殺しない。

「^{あなた}貴神は棄てない」

と。そうしたら今度は、自分を棄てたお父さんお母さんを逆に救いますよ、そういう人はいいですか。誰に棄てられてもいいよ。キリストに本当に拾われて、キリストに救われて、キリストの力ある愛がもう原始力みたいに自分がなれば、そうすれば今度は逆に人を救っていく。だから、

「我よりも何々を愛する者は我にふさわしからず」



とキリストが言われた。また、地上のその親子、兄弟の関係を引き裂くようなこともキリストは言われた。

「いつまでもその相対的な世界を問題としているか、そうじゃないぞ」

と。相対的な世界の相対的な価値を、私は否定しているのじゃないですよ。相対的な世界の相対的な価値や秩序は結構です。けれども、もうひとつ次元のちがったところになると、そいつを突き破ってからこそ本当に相対が生きてくるということなんです。いいですね。そこを間違わないようにしてください。誤解されるんだよな、本当のクリスチャンは。

●今にみている

「今にみている！ 本ものがわかるから」

と。それが逆に救ってしまう。だから、呪う者のために祈れる、逆に。敵をも愛せる。

「敵を愛せよ」

はむずかしい。生まれつきの私たちにはできません。ところが、キリストの力がくると、これができるんだ。

「まだそこまで私の信仰は行ってません」

なんて言う必要なものはない。「自分の信仰」なんてものを問題にしているからダメだ。

「絶信しろ。そうしたらキリストの信が入ってくるぞ」

と、そこらの信仰とちがうんです、いいですか。それが本当に使徒たちが受けとらされている、聖書の現実がそういう現実なんだから。

「人の毀誉褒貶きよほうへん、どうけなされようが、どう評判されようが、結構でございます。」

私は進んでいきます。みんなを逆に本当に救ってやります」

ということになる。

「なるほど小池というあの破れ器が実はものすごい力をもっていたな」

ということを証明してやります。

手島さんという人は非常に荒金みたいな人で、いろんなことを言われる。そうして手島さんを切ったってダメだ。その手島さんという人物の中に動いているある大事なものを見ろというんだ、私は。彼はなかなか性格のいろいろな圭角けいかくをもった人だ。けれども、彼の大事なものを見そこなっているから、彼を審く。ダメです。彼は本当に

「聖霊の愛」

ということを自分で体験したから、その本を書いた。私が、

「本当にこれはすばらしい」

と、私だけが本当に手島さんの聖霊の本を認めた——「認めた」というのおかしいけれども——共感した。無教会はみんな「無視した」、そういうパリサイで困るよ。人間はみんなお互いさま欠陥があります。人の欠陥を見たらどうにもならん。その奥の、その人がもつ



ている一番大事なものを見なさい。そこにキリストが光っているはずだから。そんなことをゴタゴタ言っているやつはみんな出ていきます。いいんです、出ていつて。自分がただダメになるだけのはなし。いいですか、皆さん。それだけの気合をもって進んでください。父母が、親友が、誰々が棄てても、神さまは棄てない。キリストは棄てない。そして、このキリストのその愛の力で逆に救っていく。私は中学・高等学校の校長だったときに、タバコは禁じてあるのに、タバコを吸っている生徒が見つかる。その生徒を校長室に呼ぶ。親にも来てもらう。そこではつきり言う、

「もうこれが本当にわかったら、君は今度は、タバコを吸うやつに『それはやめなさい』と逆に人を止めてやるような人になってくれよ。マイナスが本当のプラスになるぞ。」

と、私は肩を叩いた。壇上から千人近い生徒に話していても、

「二人びとりに語っているとおもって聞いてくれ」

と言った。まあそんなことで、私は校長としてもつと地道にやりたかった。いろんな意味で、時間的にもできなくて残念でしたけれども。

親子の関係、先生と弟子の関係、今は非常にそれが何かまちがった民主主義のためにおかしなことになっている。福音に本当に戻らないとダメです。

●キリストという聖名

11 エホバよなんじの途をわれにおしえ、わが仇のゆえに我をたいらかなる途にみちびきたまえ。

「なんじの途をわれにおしえ」といったって、「教え」はむしろ、教え示す「教示」ということ。

「途を示してください、それを歩いて行きます」

と。「たいらかなる途」は——これは旧約ですから「平らか」という言葉はよく出てきますけれども——あなたと一緒に歩いていくところには平安があるから、平安のみちで、なにも途は「平らか」でなくても大いに険しくても構いやしない。もうひとつ突き破って読んではいけない。

12 いつわりの証をなすもの暴言を吐くもの我にさからいて起こりたてり。

こういう「いつわりの証」はたくさんあるよ、勝手な判断をして。私も校長であったときにも、偽りの証にでつくわした。辞めようと思った第一の原因はそこにある。

願くはわれを仇にわたしてその心のままに為さしめたもうなかれ。

13 われもしエホバの恩寵をいけるものの地にて見るの恃なからましかば奈何ぞや。

むずかしい言い方をしている、



「なかったらどうしようか」

と。「エホバの恩寵^{いつくしみ}」はキリストの恩寵、キリストという恩寵体。

皆さん、どんな名前よりも、「キリスト」「という名」がもう次元的に違った慕わしい響きをもってくるまではダメですよ。「キリスト」といつたら、何だか知らんけれども、もう満ちあふれて、何が来たってどうなっても「大丈夫」、というようなこの「キリスト」という聖名。

「聖名に力がある」

とはそのことです。

「わがうちにあるもの、キリストの聖名^{みな}によって歩め！」

とペテロが言った。「キリスト」という聖名ですよ。「キリスト」という聖名に——なにも奉っているのではない——深く親しむ。聖名と一つになっている。聖名と一如の世界に入っている。

いいですか。いろいろ環境的にも、またお身体のうちでも、いろいろな支障があったり、皆さん、なさっていらつしやる方があると思いますけれども、なにも心配いらんです。

「キリストというこの驚くべき力の、生命の、愛の中に」

自分を投げ入れてくださいよ。

こないだも電話がかかってきて、

「どうも信仰がどうのこうの」

と。「住所は」どこだと聞いたたら、だいぶ遠いところだという。私は、

「いくら遠くても、あなたは本当に救われたい思ったらやつて来い」

と言った。3時間位かかるという。昔の人の道の求め方というのはもつと真剣だったね。

●キリストに全託せよ

それで、最後のことは、

14 エホバを俟望^{まち}め、雄々しかれ、汝のこころを堅^{かた}うせよ、必ずやエホバをま

ちのぞめ。

「キリストを待ち望め、雄々しかれ。汝のこころを堅うせよ、必ずやキリストをまちのぞめ」

と。この「待ち望む」というのは、ただ待つて望むのではない。

「信頼せよ。全身をキリストに任せろ」

ということ。「雄々しかれ」というのは、力んだってダメですよ、

「キリストの力を力とせよ」

ということですよ、新約でよむなら。

「雄々しかれなんて、どうも私は弱々しいからどうやったら雄々しくなれますか」

なんて、ダメだよ。雄々しくなかなれやしない。キリストの力を力とすれば、雄々しく



ならざるを得ない。そういう読み方をしてくださいよ、皆さん。もう私は異言がバクハツしそうになるから困る。いかなる勇士よりもつと勇士になる、クリスチャンは。「勇士になる」ではない、

「勇士である。なんとすれば、キリストの力を力としているから」と。自分は無力です。

「無力は無限力」

無量の力がくる。もうたまらんですよ、私は。疲れをしらんです、眠くはなるけれども。

「ああ疲れてしまった。もういやになってしまった」

とか、そんなことを思ったことはない。聖霊の力がどれほど素晴らしいかを実証しなければ、私は死ぬわけにいかん。

「聖霊、聖霊」

と口で言っているのではない。皆さん一人ひとり、そういう意味において、私のあとからどんどん進んでください。私を乗り越えて一向きしつかえない。私はしんがりになるから。

14 エホバを^{まち}俟望め、雄々しかれ、汝の^{かた}こころを堅うせよ、必ずやエホバをま

ちのぞめ。

「キリストに依り頼め、キリストの力を力とせよ」

ということですよ。「汝の心を堅うせよ」なんて困るよ、「堅うせよ」なんて。

「キリストの心を心とせよ」

ということ。これはパウロの言葉にある。キリストの心は、堅いといったって非常な弾力性をもっている。弾力性のない固さはダメですよ、もろくて。本当の固さというのは弾力性がある。柔にして剛、剛にして柔なるもの。柔剛一如の世界が本当の力です。日本刀もそういうように、軟鉄と強い鋼でもって鍛えあげられる。柔と剛、愛と義。もうちゃんとその両極をもっているんです、本ものは。

そういう弾力性のあるこの「キリストの心を心とせよ」と。サタンに対しては義の力をもつて戦う。困っている者、悩んでいる人、苦しんでいる人には、深い愛の力をもつて支え、荷う。それがキリストの弾力性のある本当の心の世界です。

「キリストの心を心とせよ。必ずやキリストに全託せよ。キリストに^{たくしん}託身せよ、身を託せよ、投身せよ、身を投げろ」

と。27篇はそういう詩篇です。生くることは伝道です、福音を伝えること。いいですか、皆さん。しっかりやってくださいよ。お願いします。

それでは、祈ります。幾人かの人に祈っていただきます。少し按手してあげますから。頭で祈るのではないよ。全部、全身的です。キリストの中に投げ入れることです。……

